

社会的多様性が主観的幸福に結びつく条件

——コミュニティか関心か——

専修大学 矢崎慶太郎

1 目的

本報告では、社会的多様性が人々の幸福度を向上させる社会的条件について、計量分析の結果に基づきながら考察する。Stichweh (2010) は、社会システム理論の観点から、近代社会は、見知らぬ人 (Stranger) を社会的に包摂することで進化してきたことを主張した。またパットナム (2000) も、社会関係資本論とのつながりから、見知らぬ人 (薄くて弱い紐帯) への信頼が近代の社会システムを効率化することを論じてきた。しかし近代という社会構造がどれだけ社会的多様性を要請したとしても、それがそのまま個人の幸福に結びつくかどうかは定かではない。さらに移民の少ない日本社会では、これまで行われてきた民族的多様性と主観的幸福度の関連性について欧米社会の研究をそのまま応用することはできない。

そこで本報告では、社会的多様性の代理指標としての見知らぬ人への信頼が、幸福に結びつくかどうか、またどのような条件でなら両者の関連が強まるかについて分析する。

2 方法

本報告では、2015 年に専修大学が日本で実施した「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」を用い、見知らぬ人への信頼が主観的幸福度を増加させるかどうかを重回帰分析から明らかにする。さらに、より両者の変数が結びつきやすい条件を明らかにするために、その交互作用項についても検討する。この点について関連が強いと予想される変数として、(1)まちづくり活動の参加状況に関わる変数と、(2)社会問題に対する意識の高さ (情報収集への積極性を表す PC 利用状況や格差問題についての認識) を示す変数を投入する。

3 結果

分析の結果、極めて微弱ながらも一般的に見知らぬ人への信頼は、主観的幸福度に対して正の効果があることが確認された。また街づくり活動への参加と見知らぬ人への信頼の変数のあいだには負の交互作用があったのに対して、日常的な PC の利用および格差問題への認識の強さとのあいだには正の交互作用が見られた。コミュニティ活動の参加者においては、見知らぬ人への信頼と幸福度が結びつかないのに対して、PC での日常的に情報収集や現代の格差に対する強い憂慮＝社会問題に対する意識の高さは、見知らぬ人への信頼と主観的幸福度を強く結びつけることがわかった。

4 結論

以上の結果から、社会的多様性の増大が人々の幸福に結びつくには、社会の様々な出来事への強い関心が必要である。むしろコミュニティ活動への参加は、見知らぬ人に対する心理的な受容を弱める可能性がある。この点から、多様性のある社会を促進するためには、コミュニティ活動よりもむしろ教育や社会的関心の強化の必要性について考察する必要がある。

文献

Putnam, Robert, 2000, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, New York: Simon and Schuster.

Stichweh, Rudolf, 2010, *Der Fremde: Studien zu Soziologie und Sozialgeschichte*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag.